



Title	大正期に於ける北海道キリスト教史への若干の考察
Author(s)	福島, 恒雄
Citation	基督教学, 11, 1-22
Issue Date	1976-07-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46323
Type	article
File Information	11_1-22.pdf



[Instructions for use](#)

大正期に於ける北海道キリスト教史

への若干の考察

福 島 恒 雄

I. は じ め に

北海道にプロテスタント諸派が伝道したのは一八七四年（明治七年）であった。一昨年で一〇〇年を数えている。ハリスト正教会とカトリックの再布教が一八六八年（安政五年）で一七七年を経ている。更に切支丹が津軽から迫害を逃がれて渡道したのが一六一七年（元和三年）と考えられているので、北海道とキリスト教との関係をみれば約三六〇年の歴史をもつことになる。それは、日本キリスト教史の中で決して短いものではない。

切支丹史の研究や明治時代の北海道キリスト教史についての研究は、かなりなされてきたが、しかし、大正時代については全くと云ってよい程ふれられてはいないようだ。

なぜ、大正期がキリスト教史研究の対象とならなかったかという点、三つの理由をあげることができるかと思う。

一つは、比較的年代が浅いことである。大正期に活躍した人々が存命していることもあって、客観的に史的研究を進めることのためらいが、ややあるように思われる。

二つには、北海道キリスト教史研究をしている人の層が薄いことである。したがって、その研究は明治期にとどま

り、大正期まで、手が伸びなかったことである。

三つには、明治期に比して大正期のキリスト教は、北海道の特色が失われて、史的研究の興味が薄いということである。多分、このことが一番大きな理由になっているものと思われる。

北海道教育大の榎本守恵氏が、昭和四十三年に発表された「北海道キリスト教史の諸問題」の中で時期区分を提起され、第一期箱館開港以降、第二期をプロテスタント布教の開始時期、第三期を内村鑑三教育勅語不敬事件以降、第四期を三教会同以降と分けられて、第四期の明治四十五年以降について、「……三教会同は、大逆事件の内務省による国民教化政策の表現であるが、明治政府が神道、仏教と対等にキリスト教団体を遇した最初ともいえる。だが内務省肝入りの国民教化運動の一翼を担うことによって、キリスト教はその特性を喪失したともいえる。右の問題を離れても、北海道的キリスト教路線の原型は第三期までにはぼ出そろっており、大正期以降の展開には、北海道的特色よりも、本土諸府県とあまり変わらない方向へ進んでいるように見える……」⁽¹⁾と述べられている。

以上の指摘は的をえたものと思われるが、しかし、大正期を過ぎて五十年、今や昭和のキリスト教受難史が研究の対象とされるようになっているとき、その歴史の流れの一時期を担った大正期についても、史的考察を進めることは必要であり、又、地方史の特色が失われたと見られるこの時期も、研究が進めば、かなり興味ある特色が見出されるように思われる。

そもそも、大正期のキリスト教という時、キリスト教史を、明治、大正、昭和の年号で分けることが妥当性をもつかどうかの問題もある。

日本の近代史の中で、大正期は一つの特徴をもっていた。大正デモクラシーという表現の中に理解されるような、吉野作造らの民本主義、武者小路、有島らの白樺派、鈴木文治らの友愛会など、明治期にも、昭和期にもなかった一特徴があったと思われる。

しかし、キリスト教史では、明治期にも、昭和期にもなかった特色があったかという点、それはきわめて乏しかったと云わざるをえない。日本キリスト教史の研究で、すぐれた労作を出しておられる、石原謙氏の『日本キリスト教史論』⁽²⁾或は、土肥昭夫氏の『日本プロテスタント教会の成立と展開』⁽³⁾などの中にも、大正期についてふれているのを殆ど見出されないのは、そのことを意味しているのであろう。

大内三郎氏は『日本プロテスタント史』⁽⁴⁾の中で大正期のキリスト教の特徴を、おおよそ、次のように七つあげられている。

- 一、大正期は明治期とはちがう歴史的 성격の第二代目のキリスト者が活躍したこと
- 二、それぞれの教派の特徴、性格がはっきりしてきたこと
- 三、教派間の共同精神がみなぎってきたこと
- 四、伝道する教会として教勢がのび、とくに日曜学校が盛んになってきたこと
- 五、社会運動や労働運動が盛んに活動したこと
- 六、内的問題を深めると共に神学的思索が深められてきたこと
- 七、純福音派と呼ばれる一群が出てきたこと

以上は必ずしも大正元年から十五年までというのではなく、明治四十年代から昭和六年くらいまでのことを含めて考えられると述べておられる。

筆者は『北海道キリスト教略史―主として明治中後期の教派別発展の経緯』⁽⁵⁾の拙い発表の中で、時期区分を六期に分けてみた。

第一期 前 史（一六一七～一八五七）

第二期 開始期（一八五八～一八八六）

第三期 教会形成期（一八八六～一九一一）

第四期 協力伝道期（一九〇一～一九三二）

第五期 苦難期（一九三一～一九四五）

第六期 戦後発展期（一九四六～）

本稿は第四期の協力伝道期にあたるわけだが、一九〇一～一九三二年としたのは、一九〇一年（明治三十四年）は二十世紀大挙伝道が各派協力でなされたときであり、一九三二年（昭和七年）は賀川豊彦により提唱された神の国運動が終った時で、戦前の各派協力伝道はほぼこの時で終わっている。北海道でもこの協力伝道により、かなりの成果を収めている。特に大正三年～六年までになされた全国協同伝道により本道の教会もかなり伸びていることがみられる。

したがって、協力伝道期としてこの時代をみることは、そうあやまりではないように思われる。

本稿は、一つのテーマを掘り下げるといよりは、未だあまり手がけられていない大正期の北海道キリスト教史研究のいとぐちをつかむ意味で若干の考察としたが、いわば大正期における北海道キリスト教史研究序説ともいべき内容をめざしたものである。

したがって、第一に大正期の本道のキリスト教界全般の概況を見、第二に今後の研究テーマとなると思われるいくつかの特徴をあげてみたい。

II. 大正期に於ける教会の概況

大正期に本道にあった教会の教派は、メソジスト、組合、日基、聖公会、バプテスト、福音ルーテル、救世軍、ホーリネスのプロテスタント八教派とカトリック、ハリストス正教会であった。この他、単立教会として札幌独立教会及び無教会の群である。モルモン教会もあったが、キリスト教としては少し問題を感じるので、本稿には入れてい

ない。キリスト教関係団体としては、YMCA、YMCA、婦人矯風会などが活躍していた。

大正十三年の教勢は以下の如くなっている。⁽⁶⁾

	日	基	組	合	メソジスト	聖公会	バプテスマ	救世軍	ホーリネス	カトリック	ハリストス	他	計
教会	一七	一一二	一四	三〇	一	一〇	七	一五	一一二	三	一一四		
信徒	一八六九	一四五二	八四七	三〇六五	四一	一八四	?	一六六八	一六一四	(四〇二)	一一四〇		
教職	一四	八	一一	二二	一	九	七	一五	八	三	九七		

この中で大正期に伝道開始して生れた教会は、救世軍八、ホーリネス五、聖公会二、メソジスト二、組合二、ルーテル一、日基一、カトリック一である。これは全教会の一八%で、八二%は明治期に伝道開始した所である。したがって、大正期は開拓期であるよりは内側の充実をめざした時代であるということができよう。

更に、キリスト教団体では北大と小樽高商にYMCAの学生部があり、札幌と旭川に支部があった。YWCAは遺愛女学校だけが記録されている。婦人矯風会がかなり活発に働いた時代で、道内には小樽、札幌、旭川、帯広、室蘭、岩見沢、滝川、野付牛、名寄、留萌の一〇カ所に支部があった。⁽⁷⁾これは大正二年に婦人矯風会会長の矢島楯子が来道したのがきっかけになったと思われる。しかし、明治の終りからピアソン夫人などが中心となって、遊郭に売られた女性解放運動なども盛んになされていたのである。

次に、大正時代に北海道で働いた伝道者及び信仰の証しをした信徒の中で、比較的知られている人々を拾ってみると以下のようなキリスト者達が活動していた。⁽⁸⁾

【牧師、司祭、伝道者】

(日 基) 高倉徳太郎 (札幌・大正二〜七年)

小野村 林蔵 (札幌・大正七〜昭和二十八年)

手塚 儀一郎 (函館・大正二〜六年)

熊野 義孝 (函館・大正十五〜昭和六年)

G・P・ピアソン (Pierson) (北見・大正三〜昭和三年)

(組合)

海老沢 亮 (札幌・大正三〜十二年)

G・M・ローランド (Rowland) (札幌・明治二十九年〜大正十三年)

(メソジスト)

白戸 八郎 (札幌・大正六〜十一年)

川尻 正修 (札幌・大正十二〜昭和三年)

(聖公会)

W・アンデレス (Andrews) (明治二十六〜大正七年)

J・バチラー (Batchelor) (明治十一〜昭和十六年)

八代 欽之助 (釧路・明治三十三〜昭和十年)

伊藤 松太郎 (函館・明治三十一〜大正十二年)

向井 山雄 (大正十二〜昭和三十二年)

(ホーリネス)

森 五郎 (札幌・明治四十三〜?)

丹羽 平三郎 (小樽・大正三〜?)

(カトリック)

岡田 普理衛 (当別・明治三十〜大正十五年) (ジェラルド・フリエ・フランソワ)

アレキサンドル・ペルリオーズ

【信徒】

(日基)

佐々茂雄、新島善直、林竹次郎、西村久蔵、小川次郎、長崎次郎 (札幌)、石島正種 (小樽)、

松岡駒吉(室蘭)

(組 合)

中村信以、藤井太三郎、宇都宮仙太郎(札幌)、佐野文子(旭川)

(メソジスト)

佐藤昌介、高杉栄次郎、佐藤善七、黒沢西藏(札幌)、山口友治(旭川)

(カトリック)

三木露風(当別)

(独立教会)

宮部金吾(札幌)

(無教会)

浅見仙作(札幌)

III. 大正期におけるキリスト教史の特色

以上のことから、今後の研究課題になると思われる大正期の特色をいくつかあげ、若干の考察を試みたい。

第一は、この時代に新しく北海道へ伝道した教派についてである。

救世軍、ホーリネス教会、福音ルーテル教会の三派とカトリックのフランシスコ会であるが、救世軍とホーリネス教会は明治の終りに伝道開始し、大正期に著しく成長した教派である。しかし、いずれも戦時中に、最も激しい弾圧をうけ、教会は解散させられ、資料は殆んど散逸してしまつた。いろいろな理由はあるが、いわば国家権力とキリスト教との間でスケープゴートのな役割を担わされたのである。大正、昭和期のキリスト教史の中でこの二つの教派の資料を発掘・収集することが課題になると思う。

道内の救世軍については、中川収氏の研究⁽⁹⁾があるだけで、それによると伝道開始は明治四十年二月、函館に小隊が創設されるが、間もなく閉鎖され、大正二年の十一月、遠軽に二番目の小隊が創設されたことが記されている⁽¹⁰⁾。大正十三年には札幌、小樽、函館、旭川、遠軽、帯広、留辺蘂、本別、紋別と札幌に大隊本部の一〇カ所ができて⁽¹¹⁾いる。

日本に救世軍が伝道したのは明治二十八年で、山室軍平が『平民の福音』を出したのが三十二年であるから、北海道は比較的遅かった。大正期に入って道内伝道に力が入られた事なのであろう。

ホーリネス教会は大正の初期、東洋宣教会といっていた。何度か名称が変えられたが、創始は明治三十四年にカウマン宣教師夫妻が渡来し、中田重治と共に伝道を開始した時からとされている。⁽¹²⁾明治四十一年東洋宣教会となり、四十四年に日本聖教団と東洋宣教会とに一時分離したが、間もなく復帰し、大正六年に日本ホーリネス教会となり中田重治が監督となった。

北海道との関係は、中田が以前メソジスト教会の伝道者だった頃、明治二十五年と二十八年まで八雲、小樽、千島で働いたことがあるので、早くから北海道伝道を考えていたようだ。詳しいことはわからないが、明治四十二年の年会任命者表⁽¹³⁾をみると小樽に金田信一、杉山つねが任命されていることが出ている。

旧約学者の渡辺善太氏は当時、東洋宣教会に属しており、自叙伝ともいわれる『回心とその前後』⁽¹⁴⁾の中に、北海道伝道と講演旅行をしたことが書かれている。小樽、軽川、札幌、滝川、旭川、八雲を中田監督と共に巡回している。たぶん四十三年頃であつたらう。札幌では森五郎が任命されており、活発な伝道を開始していた。他の教派からも参加する信徒がおり、YMCAに各派の教職が集り、中田を迎えて、いわゆる教会裁判というのが行われている。⁽¹⁵⁾大正時代に入ってホーリネス教会は全盛時代を迎えるが、各地でこの新教派との衝突が起こってくる。札幌はそのはしりとなったものであろう。

福音ルーテル教会はフィンランドから、明治三十三年(一六〇〇)にウエルワーズ宣教師夫妻が来日して日本伝道がはじまった。北海道には大正四年ヴィサオライネン宣教師と溝口弾一牧師が札幌に伝道し、大正十二年ヴィサオライネンの帰国によりとだえたが、昭和六年に西丘一雄、八年にヴィサオライネンの再赴任で再び伝道し、九年に会堂が建てられた。しかし詳しいことはあまり記録に残っていない。

この頃、北海道でも札幌独立教会とは別に無教会の群が集いをもつようになった。その中心となったのは、矢内原忠雄が信仰の老父と呼んだ浅見仙作である。⁽¹⁵⁾ 第二次大戦の苦難期の中で明確に非戦論を北海道で唱えたのは浅見仙作だけであった。彼は明治三十五年に中田重治の札幌巡回伝道で、キリスト教にふれ、その年の十一月に札幌メソジスト教会で洗礼を受けた。翌年アメリカに渡り、日露戦争の最中に絶対非戦の信念をもち、内村鑑三の『聖書之研究』を読んで無教会の群に入った。

四十一年に帰国し、石狩を根拠地として製麻会社につとめながら、平信徒伝道者として、小樽、五の沢、北村、夕張等を巡回して、集会をもった。大正十四年に札幌に移り、浴場業を営みながら、各地を巡回し、又文書伝道を盛んにした。武田清子氏は『土着と背教』⁽¹⁷⁾の中にやや詳しくその生涯と思想について述べている。

更にカトリック教会についてもふれてみたい。カトリックの北海道伝道はパーリー外国宣教会により、一八五九年メルメ神父の派遣で再布教がはじめられた。一八七八年(明治十一年)にフランスのシャトル聖パウロ修道女会が、函館に修道女をおくって孤児院や、白百合女学校などをたてて社会に貢献した。一八九一年(明治二十四年)に函館教区がおかれ、東北六県と新潟、北海道が管理された。一八九六年(明治二十九年)にシントー会のトラピスト修道院を招ぎ、当別に男子修道院、湯の川に女子修道院をたてている。札幌には一八八一年(明治十四年)から伝道しているが、一九〇七年(明治四十年)にドイツのフランシスコ会を札幌に招ぎ、内陸の伝道を委ねたのである。

フランシスコ会は一九一五年(大正四年)札幌知牧区を開設し、函館を除いて全北海道を管理することとなり、いわば、パーリー外国宣教会から、ドイツのフランシスコ会に北海道伝道の責任を委任したのが、この大正時代であり、函館から札幌を中心を移したときでもあった。又フランシスコ会は一九一一年(明治四十四年)に天使病院を設立し、この病院で病める身が癒やされ、更に霊的救いにあずかったものが、昭和三十二年迄約四〇〇〇人に達したと報ぜられている。⁽¹⁸⁾

又、マリア・フランシスコ修道女会は一九二五年（大正十四年）札幌に藤高等女学校を設立し、敬虔な信仰に基づいて女子教育に貢献している。

第二は協同伝道についてである。

これは大正期のエポックをなしたもので、一つには各派の教勢が伸びた時であり、一つには教団合同への足がかりともなったものである。

この協同伝道は、一九一〇年にエンジンバラで開かれた世界宣教大会の決議に基づき、全世界の諸教会が相呼応して伝道を盛んにするため継続委員会が上げられた。その時の議長がJ・R・モットーで、一九一三年（大正二年）に來日し、モットーを中心とした協議会がもたれ、大正三年から六年迄の三年間協同伝道することを決めたのである。中央委員長に井深梶之助がおされ、関西部委員長に、宮川経輝、関東部委員長に植村正久があげられている。そして第一年度集中伝道地として、他の府県と共に函館、札幌、小樽、旭川などが選ばれた。

札幌では佐藤昌介を委員長とし、副委員長に宮部金吾、海老沢亮をあげ、各教派の著名な信徒教・職を網羅して組織をつくつてのぞんだ。北光教会機関誌『北光』は二カ月に渡って特輯号とし、「協同の精神は外部に向つて福音を宣伝するは勿論、しかし、もう一つの価値は基督者内部の協同を促進するにある。札幌は我国キリスト教会の発源地として、光榮ある歴史を有するが、近來ややに、美しき協同的精神の發揮せざる憂いがあった。かかる恨みが一掃されたことである。」と述べている。

この協同伝道で本道に応援にきた講師は、井深梶之助、植村正久、笹尾泰太郎、江原素六、貴山幸次郎、マッケンジー、多川幾造、広岡浅子、森村市左衛門などであった。

集会数札幌二五回、集まった人八七五〇名、求道を志したもの一七七名と記されているローランド宣教師は協同聖

歌隊をつくり、北辰教会（現在の北一条教会）の牧師高倉徳太郎は協同別動隊として、会場に入れなかった人々のために路傍説教隊をつくって演説している。おそらく高倉の生涯の中で路傍伝道に立ったのはこの時だけであつたらう。協力伝道は札幌だけではなく、北海道各地でも盛んに行われて、各派の協力心は高まっている。

北海道全体の教会がこの運動により、どれだけ教勢がのびたかを知る資料はもっていないが、札幌北光教会の統計では著るしい進展のあとがみられる。²⁰⁾

		大正									
		二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
会	員	二六三	二九九	三二六	四五三	四七七	四九四	五〇九	五一一	六四九	六八〇
増	加	一二	三六	二七	一二七	二四	一七	一五	二	一三八	三一
朝	拜	七五	七六	七八	八八	九四	八一	七五	七五	九二	一〇七
夕	拜	四七	九二	九〇	九三	七七	七二	八一	五八	八六	九五

協同伝道がはじまつた三年から五年の間の受洗者が一九〇名で、特に最終年度一二七名の増加となっている。²¹⁾

第三は第一次大戦とロシア革命の影響である。

大正三年から八年までであつた第一次大戦とその後の戦後不況は本道の経済、社会に及ぼす影響も大きかつた。独占資本による鉱工業の発達や、非人道的な土工部屋の増加、大正二年の凶作も響いて地主小作の階層分化など社会問題となるさまざまな矛盾がはらんでいた。

キリスト教会も、また別な意味で第一次大戦の影響をうけていた。宣教師の献身的な働きにより成長した教会は、経済的自立が弱く、世界の動向をもろに受けやすかつた。

本道の伝道史の中で輝しい足跡を残してきた聖公会は英国の CMS (The Church Missionary Society) 宣教協会によって開始され、支えられてきた。日本の聖公会はアメリカの聖公会と英国の聖公会とによって伝道されたが、北海道は英国聖公会ののみによつたのである。それ故に第一次大戦の影響は本州の聖公会よりも大きかったものと思われる。教区九十年史の中には

「世界第一次大戦の影響でヨーロッパ全体をおおつた経済的不況は英国に猛威をふるい人々は困苦にあえいでいた。自然、英国聖公会も影響を受け、特に海外宣教師団体では世界各地に派遣していた宣教師の経済的維持の面で危機に瀕した。そこで CMS も思い切つた削減政策を行ない、宣教師の本国召還、退職時期を早める等の処置をとつた。結果、宣教活動の遅滞、または停止という悲しむべき事態が各地に起こらざるを得なかつた。」⁽²²⁾

特に影響を強く受けたのはアイヌ伝道をライフワークとしていたバチラーである。一般に農村にある教会の自立は困難であつたが、経済的に貧しかつたアイヌの人々によつてつくられた教会はもつと難かしかつた。『ジョン・バチラーの手紙』の訳、編者である仁多見巖氏は、第一次大戦中の CMS の混乱と事実上通信の困難さもあつてか、この時期のバチラーの手紙を入手することはできなかつたと書いているが、註の中で「戦時下の英国の CMS 本部から宣教費教役者の給料などは大削減され、バチラーの心痛ははかり知れないものがあつた」と述べている。⁽²³⁾

カトリック教会は経済的問題よりも、ドイツ・フランシスコ会であつたことの困難である。日英同盟より、日本は連合国軍に加わり、ドイツに宣戦布告したので、ドイツ人は敵の關係にあつた。それ故にドイツからきた宣教師はかたみのせまい思いで生活せざるを得なかつたし、具体的な困難も多くあつた。丁度、札幌は知牧区が設置された時だが、前途は必ずしも明るくはなかつた。フランシスコ修道会五十年史には、

「知牧区設置と共に、わが布教地は新しい時期に突入した。世界大戦があつたので、遺憾にもその時期は全くよくなかつた。新しい神父たちはくることができなかつたし、資金は相当逼迫していて前途が不安であつた。なるほど神

父はみな働くことができたが、時のたつにつれて警察からの干渉が殖えた。その上ドイツを敵としている国々の政府が日本も、国内に在住するドイツ人を、宣教師たちまでも収容所に入れてほしいと、時々強要してきた。これは実行されなかったが、しかし連合国の要求に多少譲歩するために最初のうちは自由であった外国との文通が禁じられた。後、間もなくいわゆる売買禁止令が出され、それによつてただ必要な食料、衣料、その他生活する上に²⁵ぜひともなくてはならぬ物を除くほかはあらゆる売買が禁じられたのである。看視もまた一層厳重になった。」

この困難は大戦が終つても、なお続いた。ドイツの敗戦から日本の教会を支える献金は難かしくなり、米国にゆく宣教師に頼んで二年間北海道のフランシスコ会の宣教のために、米国から献金をしてもらい、負債・生計・建築費などの支えをもらったとある。²⁶

ドイツ・フランシスコ会は北海道に宣教の祈りをもつたので、後に東京、九州に教会がつくられたが、第一次大戦の時の困難は主として北海道にみられたものである。

更に一九一七年（大正六年）におこつたロシア革命の影響である。当時、社会主義思想家は、売文社などをつくり、いわゆる冬の時代をすごしていたが、ロシア革命は希望の燭火となった。一般社会では不安と恐れをもつて迎えられたようである。キリスト教会はやや困惑したおもむきで事実の推移を見つめようとしていた。

しかし帝政ロシアと深い関わりをもつハリストス正教会は大きな衝撃であった。明治四十四年にニコライ大司祭が亡くなってから、セルギー大司教であったが、この革命で伝道学校、神学校、女子神学校、京都女学校などほとんど閉鎖せざるを得なかった。

ハリストス正教会が日本の伝道をしたのは函館が最初であり、ニコライも函館を根拠地として本州の伝道をし、後に東京に移つたが、それだけに道内は早くからかなり奥地までも伝道し、教会がたてられている。資料が散逸しているので詳しいことはわからないが、この革命はかなりの動揺を与えたものと思われる。カトリックのフランシスコ会

のように戦争によって敵味方との関係におかれたことは一九〇四（明治三十七年）の日露戦争のとき経験しているが、それとは違った、もっと深い困難が生じたのである。

日露戦争の時、ニコライはかなり悩んだことが、オーテス・ケリーの『日本キリスト教史』(A History of Christianity in Japan—ROMAN CATHOLIC AND GREEK ORTHODOX MISSIONS)²⁷⁾の中に書いてあるが、ニコライは、キリストの教えは自分の属している国を愛することであると語り、日本につかわされた者として、日本のキリスト者と共に、日本の勝利のために祈った。又、捕われの身となって日本に移されてきた七三〇〇〇人のロシア兵のために働く役割りがあったことが書かれている。

しかし、ロシア革命のときは事情が違っていた。歴史的展望のできない暗さの中に立ったのである。札幌正教会小史には

「この年ロシアではレーニンの革命政権成立、日本正教会に対する援助は打ち切られ、日本正教会は経済的自立を余儀なくせられ、苦難の道を歩まなければならなかった。」²⁸⁾と書いている。地方の教会の信徒が、この困難をいかに受けとめ、のりこえて行ったかは今後の研究に課せられていることであろう。

第四は高倉神学の初期形成期における北海道との関わりである。

大正から昭和にかけて日本の神学界を代表する人に高倉徳太郎と熊野義孝氏がいる。面白いことに、高倉は大正の初めに札幌へ、熊野氏は大正の終りに函館に赴任し、初期形成期を北海道で過ごしている。

高倉は大正二年十月から、大正七年の十月まで、札幌北辰教会の主任牧師をしていた。この間に次女を失うという悲しい経験をしている。高倉徳太郎著作集の解説を書いた女婿佐藤敏敏氏は

「高倉徳太郎の神学者としての生涯はイギリス留学をもって二つの時期に分けることができる。留学から帰るまで

の時期が、いわば形成期であるとすれば、それ以降の時期が確立期を意味している。世上、高倉神学といわれるものは、いうまでもなく確立期の文章の中に見出される……これに対して形成期の文章は、福音的キリスト教の立場を確立するにいたるまでの高倉の内的発展の跡を示すものであり、これはこれとして極めて魅力のある貴重な魂の記録である⁽²⁹⁾。」と書いている。

高倉は明治四十三年に神学社を出て、二年間富士見町教会の伝道師をし、その間に一年間、軍隊に行き、大正二年一月京都吉田教会の主任牧師として迎えられた。その年の十月に札幌へ招聘をうけ、大正七年十月迄働いた。十月に北辰教会を辞任して上京し神学社に教鞭をとり、十年の八月スコットランドに留学している。その後の生涯をみて一つの教会に牧師として全力投球したのは、この形成期といわれる札幌だけであつたようだ。

それ故に、この五年間に札幌北辰教会は大きく伸び、六十年史にも「北辰教会の教勢は今や、全日本基督教会の注目をあびるほどの成長ぶりを示した。」⁽³⁰⁾と書いている。

この時代に世に出した論文や書物はそう多くはなかった。それだけに伝道牧会に打ち込んだものであつたろう。しかし、高倉神学の初期形成期に北海道での生活はかなり大きな影響があつたように思われる。

高倉神学の特徴は贖罪の信仰にあつた。自我を徹底的に追求する罪責と、十字架の恵みによつてのみ救われる恩寵の神学である。日本のキリスト教界で罪の問題を徹底的に追求した人に内村鑑三と高倉徳太郎がいた。その神学的思想の方向生かなり違うものであつても、十字架と神の恩寵をといてやまないことでは同じである。この二人は時代がちがつても、若き日、札幌に数年過ごしたことは興味深いことである。

高倉は「祝福せらるるまでに」の中で、札幌に明治四十二年、神学社の三年生として、夏期伝道にきた。求道者会で愛について話すことを考えながら大通りを散策していた時、活けるキリストの愛に触れたことを次のように書いている。

「その時私の魂はほんとうに活けるキリストの愛に捉えられたと感じた。自分の心は主の愛にまったく燃やされて焔のようになった。私は嬉しくてたまらない。涙がとめどなく流れた。私は狂気のようになって草原の中を夢中で幾度も幾度も回っておった。その晩は心から確信をもってキリストの愛について語ることができた。私はこの経験以来厚薄はあったにせよ、活けるキリストに対する信仰を続けてきたように思う。」

これは恩寵の経験である。又、彼は大正十一年の受難週に贖罪の経験が高められたことを書いている。これは大正五年の終りに聖書研鑽社から依頼されてロマ書の研究を執筆している中に三章の二三〜二四節の言葉が彼の心に深くふれたからであった。

「私は自分で自分の罪を処置することはできない。自分のうちには一点も自己を救う力のないことを痛感したのであった。私はキリストの十字架の下に身を寄せるほかにいいことを見出した。深く罪に食い入れられておる、わが魂が『功なくして神の恩恵により』義とせられることはまことに有難いことであった。大正七年の受難週にはことに私の贖罪の経験は高まったように思う。」⁽³²⁾

彼の神学思想はスコットランドに留学してフォサイスの神学を学ぶことにより深められたと云われるが、その萌芽は札幌で経験した恩寵と贖罪の深い感動にあったと云うことが出来るであろう。

第五は、科学と宗教論争についてである。

大正十一年九月から十二年の一月迄北海タイムス紙上で北大の生物学（昆虫学）教授松村松年と北一条教会牧師小野村林蔵、カトリックの信徒で詩人の三木露風、北大工学部教授坂岡松太郎、北光教会牧師海老沢亮などが寄稿し論戦したことである。

普通は松村、小野村論戦と云われている。金田隆一氏は『小野村林蔵の人と思想』の中で「特に有名なのは、一九

二二八(大正十一)に北海タイムス紙上において『キリスト教迷信論』『宗教無用論』を進化論の立場から説いた北大教授松村松年博士との二カ月間に亘る大論争で、当時北海道キリスト教会ばかりでなく、多くの識者の注目を集めた事件である。」と書いてある。⁽³³⁾

これは、大正十一年九月二十日から九月二十九日迄五回に渡って松村松年が『科学と宗教戦』と題して、ダーウィンの進化説と聖書の創造物語りの違いを論じ、聖書の記事は現代の科学知識からすれば、荒唐無稽の物語りであり、歴史家はもはや人類社会に宗教の価値を決することはできなくなった。進化論に関する事実は最早決定的なもので動かすことの出来ない真理である。果して、キリスト教がこの大混乱の中に立って如何に変化してゆくか、吾人の刮目するところである、等の要旨を述べた。

このことに対して、最初に反論したのはカトリックの信徒で当別トラピスト修道院にきていた詩人三木露風であった。彼は九月三十日と十月一日の二日間にあつて『聖会のための弁語』と題して、松村氏の論説は緻密かつ論理的であるが、しかし、科学のもつ真理には限界があるのでないだろうか、又、キリスト教に対する理解も固定的で不十分なように見られる。純正な聖会は科学が発達しても、ごうもその基礎は動かされることはない、との大意を述べている。

続いて、十月二日から十一日迄、四回に渡って小野村林蔵が『科学と宗教戦を読んで』と題して論じた。松村氏は昆虫学者であつて神学者ではない。このダーウィンの進化論と旧約聖書の創造論の關係はすでに三十年前に論じつくされ、今の神学界では問題となっていない。松村氏は小樽新聞に論旨の根拠をウエルズの本によつたと書いているが、私のもっているウエルズの本と内容が違っている。誤読して紹介しているのではないか。ウエルズの宗教観は他の書物で紹介しなければならぬとの要旨で、かなりきびしく反論している。

これに対して松村は十月二十六日から十二月六日迄十八回にわたつて『基督論』と題して論じ、大意は、三木氏の

論は宗教家らしく敬虔にとむもので尊敬にあたいるが、小野村氏の論は実に侮辱した文章で牧師としての言葉ではない、かかる者は社会からほうむるべきであるとの激しい語調で述べ、キリストは本当に存在したのか、聖書は正しい歴史の史料か、外典と正典との間にちがいはあるのはどうか、歴史上、いくつかの会議で聖書は唯一の真理とされてきたか、イエスの救いとパウロの救いはちがうのではないか、キリストの歴史は正史に表われたか、十字架はキリスト教の残忍性を現わしているものである、等を述べ、終りに日本人の体育が退歩しているのはキリスト教の影響であると筆をすべらしている。

このことに対して小野村の反論はタイムス紙上には出していないが、十二月十日の北一条教会で出している『聖き響き』の機関誌に「福音書の歴史的価値」と題して近代聖書学の成果を述べて応えている。

タイムス紙上では、十二月十一日と十二月十三日の二回にわたって北大工学部の坂岡末太郎が『余の宗教論』と題して寄稿している。論旨は、宗教のもつ非近代性をのべながらも、しかし科学に決して宇宙の理法を説明することはできないと謙虚に書いている。

やがて、翌年の大正十二年一月十六日から十九日まで、北光教会牧師の海老沢亮が『近時思想界の趨勢』と題して四回にわたって寄稿し、世界思想界の流れは宗教蔑視から、宗教を重むる方向に向っており、ダーウィンの説は一つの学説であって、そのみ重視するのは一つの錯誤ではないであろうかと述べ、更にコペンハーゲンで開かれた国際基督教連盟の思想について紹介している。

北海タイムス紙の紙上論争はこれで終るのだが、松村は更に十二年の一月東京日々新聞に十四回にわたって『科学と宗教戦』という同じ題でのせている。これを読んで、東京の靈南坂教会牧師小崎弘道が『科学と宗教戦を読んで』という題で一月二十九日から四回にわたって論じた。主旨は、今どき珍らしい内容であるが、これはすでに四十年前、モールスや外山博士によって論じられたものと内容的にあまり変っていない。聖書は科学の書でないから、科学

と宗教の学問の区別を明確にすべきではないかと述べている。

わが国のキリスト教史の中で、何回か紙上論争がなされたことがある。有名なのは井上哲次郎との「宗教と教育の衝突の問題」でなされた論争である。『植村正久とその時代』⁽³⁴⁾には二〇〇回近くも各紙で論争し、三〇数冊の本が出されていることが書かれている。

次に二〇世紀大挙伝道の後、植村正久と海老名弾正の「三位一体論」⁽³⁵⁾の論争があり、更に少し時代は下って昭和二年十一月福音新報紙上で佐藤繁彦と高倉徳太郎の「福音的基督教」をめぐる論争がある。

しかし、北海道で一般新聞紙上に聖書をめぐっての論争が、これほど多く参加し、半年に渡ってなされたのは明治・大正・昭和を通じてこの時以外にはなかった。論争の勝敗は別にして大正期を特色づける史的事件の一つであったといわれよう。⁽³⁶⁾

その他、大正期に興味あることとして、次のことを上げることができると思うが、紙数がないのでテーマだけを記し、今後の課題として論考されることを期待したい。

- (1) 北海道労働運動と松岡駒吉（明治四十二～大正六年）
- (2) 酪農の振興とキリスト者達「宇都宮仙太郎、黒沢酉蔵、佐藤善七、深沢吉平ら」
- (3) 大正期の社会事業とキリスト者（留岡幸助の家庭学校、相川勝治の博愛職工学会、助川の大化院など）
- (4) キリスト教と報徳思想（留岡、黒沢、深沢など）
- (5) 有島農場の解放をめぐる（大正十一年）

本稿は一九七五年の北海道基督教学会で発表したものを訂正加筆したものである。三年前に北海道大学文学部が中心となつてした「北海道キリスト教史資料の総合的研究」の学外研究者として参加した際、調べた資料に基づくものであることを付記し永井秀夫教授及び先学の方々に感謝したい。

註

- (1) 榎本守恵「北海道キリスト教史の諸問題」『新しい道史』第六卷、第三号、昭和四十三年八月、一四一―一九頁。
- (2) 石原 謙『日本キリスト教史論』、新教出版社、一九六七年。本書は戦後二十年間に書かれた論文集で必ずしも通史を意図されたものではないから、大正時代として区切られているものはないが、やや関連あるものとして、高倉徳太郎を論考された「キリスト者の自我追求」と「日本神学の課題」で少しくふれている。
- (3) 土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』、日本基督教団出版局、一九七五年。本書も論文集で殆ど大正期について論及されていないが、わずかに「一九三〇年代における日本基督教会の活動」の中で、昭和初期との関連で少しくふられているだけである。
- (4) 大内三郎「日本プロテスタント史」は海老沢有道共著『日本キリスト教史』、日本基督教団出版局、一九七〇年の中の後篇で、第四集を大正期のキリスト教として論考されている。その特徴については四三七―四五二頁。
- (5) 福島恒雄「北海道キリスト教略史―主として明治中、後期の教派別発展の経緯―」『新しい道史』第一〇卷第一号、第二号、昭和四十七年。
- (6) 『基督教年鑑一九二五年』、一九三―二〇〇頁。信徒数は巻末統計表（文部省宗教局調査）前掲書、二〇九頁。
- (7) 大正期に活躍した教職信徒名は筆者が知っている範囲なので、札幌が中心となってしまう。研究が進めば、地方教会からこのリストに加えないければならない人物がかなり上げられると思う。
- (8) 中川 収「北海道同志教育会と救世軍遠軽小隊、および遠軽教会の形成」『キリスト教史学』第二六集、昭和四十七年、三五―三八頁。
- (9) 前掲書、二三頁註。
- (10) 『基督教年鑑一九二五年』、一九四頁。
- (11) 山崎鷺夫・千代崎秀雄共著『日本ホーリネス教団史』、昭和四十五年、一―三頁、四四頁。
- (12) 前掲書、三九頁。
- (13) 渡辺善太『回心とその前後』、日本基督教団出版部、昭和三十二年、一六八―一七一頁。後期には同氏の聖書学界順礼紀行と書かれている。
- (14)

- (15) 『日本ホーリネス教団史』、六〇頁。教会裁判とは既存の教派の信徒、役員が新しく始められたホーリネス教会の熱心さにひかれて、ホーリネス教団に変えることを問題として話し合われたことで、他の教派では必らずしもそう云ってはいない。
- (16) 「浅見仙作翁は私の最も敬愛する福音の証者であり、また長年私のため、日夜祈ってくれている信仰の老父である」矢内原忠雄「公判傍聴記昭和二十年六月」、武田清子著『土着と背教』、三三一頁より引用。
- (17) 武田清子「浅見仙作の思想」『土着と背教』、新教出版社、一九六七年、三二五～三五六頁。
- (18) 「北海道におけるフランシスコ修道会五十年」、機関誌『光明』、昭和三十一年一月～五月、第一一七五号(二)。
- (19) 『北光』、札幌北光教会機関誌、大正四年、六月号。
- (20) 前掲書、大正十二年八月号。
- (21) 奥山 亮『北海道史概説』に一九一三～一九一八年までの主な市の人口増加をのせているが(一九五頁)、それによると函館一三三%、小樽一一三%、室蘭一二四%となっているが、札幌は九八%に減っている。したがってこの統計は人口増との関連でみることはできない。
- (22) 『日本聖公会北海道教区九十年史』、昭和四十一年、一一九頁。
- (23) 仁多見巖訳編『ジョン・パチラーの手紙』、山本書店、一九六五年、三〇二頁。
- (24) 前掲書、二九二頁。
- (25) 『北海道におけるフランシスコ修道会五十年史』、一一七七頁。
- (26) 前掲書、一七八頁。
- (27) Otis Cary A History of Christianity in Japan — ROMAN CATHOLIC AND GREEK ORTHODOX MISSIONS — 四一七～四二二頁。本書は第一巻が A History of Christianity in Japan — PROTESTANT MISSIONS — として出されている。一九〇九年に出されて一九七〇年に再刊されたもので、大正期のこととは書かれていないが、ハリストス正教会の資料を他に手もとにないので参考にした。
- (28) イオアン厨川勇編『札幌正教会小史』、一九五八年、一五頁。
- (29) 『高倉徳太郎著作集』Ⅰ、新教出版社、一九六四年、三八九頁。
- (30) 『日本基督教会札幌北一条教会創立六十年史』、昭和三十一年、二二頁。
- (31) 『高倉徳太郎著作集』Ⅰ、二三頁。
- (32) 前掲書、二四頁。

33 金田隆一「小野村林蔵の人と思想」『苦小牧工業高等専門学校紀要』、二号、昭和四十二年、一一頁。

34 佐波 亘編『植村正久と其の時代』、第五卷、七七三〜八二四頁。

35 前掲書、二四三〜四三八頁。

36 北海タイムス紙上の論争は、従来小野村、松村論争と云われてきたが、筆者の調べでは沢山の人々が参加しているので「科学と宗

教論争」としてとらえることが正しいと思われる。又、進化論と創造論の問題は山崎、小野村共三十年前に論じられたことで、今更の感があると書いているが、この頃欧米でも進化論論争があったことが紹介されている。大正十二年「教界時報」一六四八号に白石喜之助が「英米の基督教思想」と題して二回に渡って紹介しているが、内容は進化論の論争である。又内村鑑三の『聖書の研究』二六六号（大正十一年）の日記に英文で書いたものに、余は進化論者であると書いたために米人の読者から多くの小言があったと書いている。二六八号には「進化論と基督教」の一文を発表している。以上のことから遅れた議論と云うよりは、ロシア革命などで再燃された新しい問題であったと云われよう。

松村松年は大正十五年に『科学者が投じたる宗教界での爆弾』と題してこの問題を一冊の本にして出している。一カ月間に五版を出しているから、かなり読まれたものであったろう。

小野村のその後の著書にも、松村の同書にもこの論争についてふれているので、後々まで心に残ったものと思われる。